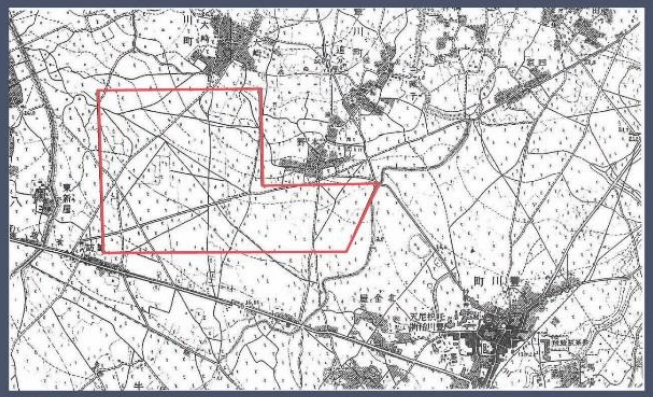
豊川市の誕生

豊川海軍工廠が建設される以前、この地域は農業を中心としたのどかな町村でした。それが工廠の建設を契機として、都市としての急激な発展へと向かうことになりました。工廠の設置は、生産施設である工場の建設はもちろんのこと、工員の寄宿舎や住宅、海軍共済病院、工員養成所など関連する諸種の施設も必要とされたため、工廠の拡大とともに周辺にはそれらの施設が日毎に立ち並んでいきました。



工廠建設前の周辺地図
大正6（1917）～7年の地図。赤色の区画が後に工廠が建設された場所。

豊川市誕生前の町村と海軍工廠の位置

豊川市の誕生を報じる新聞
（中部日本新聞、昭和18年6月1日付）
当時の豊川市役所は現在の中部小学校の場所にありました。市制施行時の人口は74,071人で、昭和15年10月1日の3町1村の合計人口30,452人の約2倍にも達していました。

海軍工廠は豊川町・牛久保町・八幡村の2町1村にまたがって建設されたため、行政的な事務手続きなどは個々の町村と折衝する必要があり不都合でした。また、各町村においても工廠の発展による著しい人口増加への対応や、合併し一つの自治体になることが国策への積極的な貢献になるとの意見が大勢を占め、合併の機運が高まりました。そして昭和18年6月1日に国府町も含めた4ヶ町村が合併し、全国で208番目の市として豊川市が誕生しました。

豊川駅付近より工廠建設予定地の本野ヶ原を望む
中央部にある扇形の森は豊川稲荷境内、その奥の広大な平地林が後に工廠が建設された本野ヶ原。